

土崎港曳山まつり

土崎港曳山まつりは、地元の人々にとって最も意義深い年中行事だ。この時期には、土崎から離れて住んでいる人たちが帰省し、祭りに参加したり、家族や友人と再会したりする。正月休みよりも多いほどだ。この祭りは7月1日に正式に始まり、土崎神明社の神を称える。祭りの中心となる7月20日と21日には、住民たちが町内単位で装飾を施した木製の曳山を
通りで引く。

各曳山の大きさは高さ約5メートル、重さは3トンから4トンにもなる。曳山の前面では、歴史上の大きな武将の人形により有名な歴史的場面が描かれる一方、曳山の背面では屋根付きの舞台が設置され、パレードの間、奏者たちが座って伝統的な曲を演奏する。舞台の上部には、ユーモアのある詩が刻まれた木製のプレートと小さなフィギュア（現代の政治家や有名人の人形であることが多い）が掲げられ、時事問題を風刺している。装飾はすべて毎年作り直され、神社の神々に奉納される。

曳山の重量を考えると、車輪を回転させるには大勢の人が必要だ。しかし、曳山には急停止するためのブレーキや方向転換のためのハンドルはない。代わりに、曳山を担当するチームは、柔軟な木の棒を使って手で曳山を誘導する。棒を車輪の下に差し込むことで、曳山を方

向転換させたり減速させたりすることができるのだ。曳山の木製の車輪は高い音をたてて回転し、これが祭りの特徴的な音となっている。車輪が熱を持ち過ぎないように、定期的に油を差す必要がある。

歴史的な記録によると、土崎の祭りに神輿が登場したのは 1705 年とあるが、曳山について

の最初の言及は、1789 年の旅行日記に登場する。この日記の中で、商人・学者であった津村淙庵(1736~1806)は、通りが 40 の山で埋め尽くされたと記している。曳山は、英国人旅行家イザベラ・バード(1831~1904)の目にも留まり、彼女は 1880 年に出版した著書『日本奥地紀行』の中でこの祭りを紹介している。長い歴史と地域にとっての重要性を評価され、土崎港曳山まつりは 1997 年に重要無形民俗文化財に指定され、2016 年にはユネスコ無形文化遺産に登録された。